

[特集]

「4歳の節」と発達保障

特集にあたって

川地 亜弥子

本誌では、「1歳半の節」をこえたあとから、「4歳の節」と呼ばれる発達の転換期までを中心に、歴史的・理論的・実践的検討を加えている。同じく発達の節に焦点を当てた「1歳半の節と発達保障」（第44巻2号）の続編と言える。

田中昌人らによる「可逆操作の高次化における階層-段階理論」において、1次元可逆操作期から2次元可逆操作期の間の時期は、長い谷間のように感じられる時期ではないだろうか。「1歳半の節」をこえた後の人たちは、生活の見通しが持て、「もっともっと」と気持ちが広がり、その生活はドラマチックである。拒否、もっとほしい、自分のものにしたい、激しい行動で示し、友達や家族とぶつかることもある。他者といえるからこそのトラブルが増える、とも言える。しかし、本誌で示される集団の中での具体的な発達の姿は、トラブルを減らすために他者から離す指導では、重要な発達の契機を奪ってしまうのではないかという問題を鋭く突きつけている。

白石正久は、発達の節の発見が人間発達の普遍性の発見でもあったことを示している。行政側の「発達が存在しない」という障害観に屈せず、障害がある子どもたちの発達研究を進めた。無理解な行政に抗して歩を進めようとする歴史は、今後の発達研究と発達保障研究の道筋を照らしている。

寺川志奈子は、二人の子どもの描画活動場面から自他関係の発達について論じている。自制心の発揮にとって、対等な仲間関係や、修正可能で自由度の高い活動と遊び込める場の重要性を指摘し、自制心が形成される発達の前提を論じている。

松島明日香は、1次元、2次元、3次元という言葉を用いて明快に説明し、子どもが他者との間で相互作用を起こしながら行動調整を発達させていく姿を描く。子どもが「自分語」をくぐらせながら世界を認識していくことの重要性を指摘している。

白石恵理子は、成人期で「4歳の節」を迎える人に焦点を当て、「発達的に理解する」ことを豊かな事例を通じて論じている。青年期の自分崩し、自分づくりと重なることで大人になる道筋が複雑になる事例等が弁証法的否定として示されている。

実践報告は3本。高橋良徳は、4歳児6人のグループの2年間の療育と子どもたちの育ちを描いている。細切れにしないゆったりとした生活の中で、「こうしたい!」という見通しを持ちながら育つ子どもたちの姿が描かれている。

柳生由布子は、中学部1年生の夏葉さんとの1年間を描いている。人が多いほどいらいらしてしまふ夏葉さん。夏葉さんの「しんどさ」を受け止め、目的を持って取り組める生活を増やしていく中で、彼女は自分で自分の変化を語っていった。

尾上真由美は、高等部卒業後の青年の発達と福祉の実践を描いた。攻撃性の高い青年の受け入れは簡単なことではない。その彼がダイナミックに変化する中で、関わる大人も大きく発達していったのではないかと思う。

本特集が、本人も、周囲の人も揺れる時期の発達保障の実践について、本音も出しながら、集団でゆたかに議論するきっかけになることを願う。

(神戸大学 かわじあやこ)